藤本さんの受難

新兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
藤本さんの受難

【Ｎコード】
Ｎ４９０６Ｕ

【作者名】
新兎

【あらすじ】
藤本さんが理不尽な目にあったり、この世のものじゃないものと遭遇したりする短編集です。たまに百合風味です。
１話完結なので、お暇な時にでもどうぞｍ（＿＿）ｍ

――――
自ブログからの転載です。

フライング

藤本は横断歩道を渡るのが不得意だ。そのせいで、赤に変わったばかりの歩行者用信号でも、つい凝視する癖がついてしまった。

たった今藤本と同じように横断をし損ねた人たちはまだ余裕のある表情をしている。ずっと緊張を保っているのは藤本一人だった。

信号の横につけられた電光掲示板には数字が表示されている。７３、７２、７１……まだ一分も切っていない。

藤本は、肩にかけているショルダーバッグを背負いなおすと小さく息を吐いた。それでも視線は信号から動かない。

びゅんびゅんと車は絶えることなく過ぎてゆく。四車線もあるので道路の向こう側は車に邪魔されてほとんど見えない。

視線を横にずらす。残り４０秒をきっていた。

次第に横断歩道の渡り口に人が集まってくる。

藤本と同じように信号が変わった頃から待っていた人たちの顔にもようやく緊張の色が浮かべ始める。ちらりと横を見ると何人かがストレッチをはじめていた。

残り二十秒。どくんどくん。鼓動が高鳴る。喉が渇く。ぎゅっと握った拳は、じっとりと汗ばんでいた。

残り十秒。気が付くとざわめきが消えている。周りの人たちは真っ正面を睨んでいる。藤本もつま先で二回アスファルトを叩くと、上手くスタートが切れるように重心を低くした。

車道の信号が黄色になり、赤になって――コメカミを汗が伝う。

瞬間、藤本は肩にドンと衝撃を感じた。
思わず、よろけて前のめりになる。こらえきれず、車道に一歩踏み出した左足。
途端、どこからか甲高いブザーの音が鳴り、周囲から一斉に溜め息が洩れる。

「あ、ちがっ、押されたんですよ」

慌てて弁解するも、フライングはフライング。予定の時間になっても歩行者用信号が青になることはなかった。
ざわめきが遠巻きに藤本を責める。

「……すみません」

藤本は、がっくりと肩をおろし次は押されても大丈夫なように人波の一番後ろに向かった。

道路交通法が変わって半年。
誰か一人でも信号を無視すれば、通行できないというペナルティが与えられる。おかげで歩行者の信号無視は半年前に比べて格段に減ったという。

歩行者用信号についた真新しい電光掲示板には８５の数字が浮かんでいた。

鞠

部室に入ると上野先輩が一心不乱に鞠をついていた。なにが楽しいのか、その顔には満面の笑みが浮かんでいる。
こんな時に限って早く来てしまったことを悔いながら、藤本は上野先輩に声をかけようかどうか迷った。
ポンポンと鞠をついている姿は童女のように可愛らしい。いつもの口煩い小言おばちゃんとはまるっきり違う姿に、藤本は声をかけないほうがいいと判断し、音をたてないよう移動して、こっそり上野先輩を観察することにした。

ぽぉん。ぽぉん。ぽぽんぽん。軽快に鞠が跳ねる。

ガチャリ。不意に部室のドアがあいた。佳恵だ。
ドアを開けてすぐ視界に入ってくる上野先輩に、彼女は驚いた顔で固まってしまった。
佳恵　と、藤本が小声で呼ぶと、彼女はバッとこちらを向き、助かったというように表情を緩めた。確かにこの珍事態を見続けるには、一人より二人の方が心強い。
藤本はなにか言いたげな佳恵に口の前で人差し指を立てることで声を出すなと指示をして、近くに来るように手招きをする。
佳恵はこくりと頷いて、カニみたいな歩き方でしゃかしゃか藤本の隣までやってきた。

上野先輩、どうしちゃったの？　吐息のような小声で佳恵が問うてくる。
よくわかんないけど、楽しそうだからそっとしてるの。　藤本は答えた。

佳恵は上野先輩を見やり、また藤本に視線を戻すと　ホントに楽しそうだね　、と言った。

それから二人は鞠を付く上野先輩をずっと見ていた。

時間が経つにつれ、上野先輩を見る人間は徐々に増えていき、終いには狭い部室の中で部員のほとんどが、鞠つきの邪魔にならないよう隅に固まって、上野先輩が立てるリズムに聞き惚れていた。

野田先輩が、　芸術だね。麻里が鞠ついてるんだよ　、と上手いこと言ったな自分みたいな顔でにやけた。

その時、藤本が、上野先輩の下の名前、麻里っていうのかぁ、と今さらながらに知ったのは内緒だ。

上野先輩は汗だくだった。それもそのはずで彼女は、彼是、４５分は鞠をつき続けている。それでも鞠をつくのをヤメラレナイ熱く燃え滾るようななにかが彼女の中にはあるのだろう。その情熱を止めることなんて誰にも出来るわけがない。

ポポポポポォン。ポポポポポォン。

ポポポポポーポポポポポーポポポポポオンポポポポポォン。

リズムはどんどん早くなっていく。見ている者たちの鼓動もどんどん早くなる。

上野先輩の手はもう斜線状態。超高速。

その時、部室のドアがまたガチャリと開いた。誰が入ってきたかなんて全員興味がない。

ポポポポポポポポ。

上野先輩の奏でるリズムは最高潮に達しており、どういった終わりを見せるのか、一同の期待はそこのみに注がれていた。

だが、たった今入ってきた彼女はＫＹな人だった。

まりっぺぇー、なにしてるのぉ？

１時間と３７分２３秒。鞠つきの音以外で久しぶりの音が空間に響いた。

その声にピクッと反応した上野先輩の手が僅か１ｍｍほどずれる。たかが１ｍｍ、されど１ｍｍ。極限状態のスピードで、その誤差は大きかった。

ポポポペー……てんてんてんころころころころ。弾かれた鞠はコントロールを失って床を転がる。

リズムが途切れた。疲労困憊の上野先輩が糸が切れた人形のように倒れた。あまりにもあんまりな結末に全員が固まった。その停止した空間で彼女だけが相変わらず空気も読まず動いていた。

どうしたの？　みんなして、そんなところに固まっちゃって。

彼女はそう言いながら、上野先輩の手から離れてしまった鞠を拾い上げる。

途端、彼女の髪が爆発。アフロヘアになった彼女は、ボンバヘッと叫びながら鞠をつきはじめた。

彼女が奏でるリズムは先輩に比べるといまいちだったが、その必死な様に、一同はまた鞠つき第二ラウンドを食い入るように見つめた。

鞠（後書き）

ACじゃないですw

エレベーター

バイトで疲れ果てて帰ってきた藤本は、エレベーターに乗り込み、階数ボタンを押すとそのまま少しだけ目を瞑った。そこへ「こんばんは」と声がかけられる。

藤本はその声の主も確かめずに「こんばんは」と返した。

「え？　あなた、私の声が聞こえるの？」

背後にいる人物が驚いたような調子で問うてくる。

おかしなことを言う人だな、と思いながら、藤本は「当たり前じゃないですか」と振り返り、そして、呆気に取られた。

藤本の背後にいたのは着物姿の――それもただの着物ではない、なんといえばいいのか、時代錯誤も甚だしい平安時代のお姫様のような格好をした少女だった。

いかにも現代に相応しくない様相。エレベーターに乗り込む時、こんなに煌びやかな色を見ただろうか？　藤本は記憶を手繰るが全く覚えがない。

「こちらを見て固まったと言うことは、私の姿も見えるということよね？」

「……あ、当たり前でしょう」

「なら、よかったわ」

少女がそう顔を綻ばせるのと、エレベーターが音もなく止まったのは同時だった。

「え？　ちょ、な、なんで？」

藤本は階数表示を見上げ、本当にエレベーターが止まっていることを確認すると慌てて、緊急用のボタンを押した。カチカチと何度も押すが、どこにも誰にも繋がる気配はない。

「そんなことしても無駄だと思うけど」

呆れたように少女が言う。

「……なんで？」

「説明は面倒だからしたくない」

「ふざけないでよ。いい？　このまま閉じ込められたら、どうなると思ってんの？」

「さぁ？」

「私が我慢の限界を迎えて悲惨なことに」

藤本はあわわと両手を頬に当てる。クスリと少女が笑った。

「よく分からないけど、あなたが限界になる前にエレベーターを動かしてあげる」

なんの根拠も確証もない言葉。

自分は全くもって運が悪い。危機感の欠片もない、変てこな格好の少女と二人きりで、エレベーターに閉じ込められるなんて。そんなことを思いながら、藤本はエレベーターの壁に寄りかかり、そのままずるずると座り込む。

階数表示は3階を示したまま、一向に動く気配はない。ワイヤーの巻き上げられる音さえしない。とどのつまり、エレベーターは完全に止まっている。

「そんな顔しないで」

藤本の溜息を聞いた少女が困ったように眉を下げる。
「エレベーターを止めてるのは私だから」
「……は？」
藤本は座ったまま、少女を見上げる。
「このエレベーターはつるべなのよ」
「つるべー？」
「知らない？」
「お笑いの人？」
「……多分、違うわ」
少女が頭を振る。藤本は肩を竦め「じゃ、なに？」と訊ねてみる。
「井戸の水を汲むときに使われていた桶のことよ」
「ああ、あれだ。秋の日はつるべ落としとかいう時の」
「そう」
「それで、なんでエレベーターがつるべなの？」
当然の疑問を口にすると少女は意味ありげな笑みを浮かべた。やけに大人っぽく、少女の外見と不釣合いな笑みに藤本は少しぞっとする。
その笑みを見ていると、なにかに気づいてしまいそうだ。否、気づいてしまった。
むしろ、今の今までどうしてそう思わなかったのか不思議なほどだ。少女はこれほどまでに現実離れした姿をしているのに。
「あの、一つ聞いていい？」

笑みを浮かべたままの少女におずおずと問いかける。少女が頷いたのを確認して、藤本は口を開いた。

「もしかして……あなたって幽霊とかそっち系の人？」

既に答えの分かっている問い。

何度も人外の者と遭遇してきた経験がこんなところで活かされるなんてー―藤本は身を硬くしながら少女を凝視する。

「……そうね」

少し躊躇しながら少女が頷いた。

分かってはいたが、はっきり肯定されると今さらながら全身が総毛立つ。しかし、怖がってばかりはいられないのが現状だ。

止まってしまったエレベーターという密室に人外の者と二人きり。それもこれまでの話をまとめると、エレベーターを止めているのは少女であり、その目的は推して知るべしである。

この状況をいかに上手く切り抜けるか、藤本はこれまでの経験と知識を総動員して考える。

「別にとって喰おうってワケじゃないから安心して」

必死で頭を絞っていると、弱ったなというような八の字眉で少女が言った。

信用できる言葉なのかは定かではないが、藤本は一旦思考をとめ少女に「じゃあ、なぜ？」と疑問の目を向ける。

「ほら、久しぶりに私が視える人と会ったから、少しお話したいなぁって。本当にそれだけ」

あっけらかんと少女が言う。
果たして、真意はどこにあるのか。藤本は少女の目を覗き込むように見つめ、やがて諦めたような息を吐いた。

「で、エレベーターがつるべってどういう意味？」
「あれ？　そこに戻るの？」
「じたばたしたってしょうがないし」
「悟りの境地ね」
「変なことには慣れてるから」

苦々しく言うと、少女はクスリと笑った。

「それじゃぁ、あなたの疑問に答えてあげようかな」
「うん」
「ただの昔話なんだけどね。このマンションが建つ前、この土地には古い井戸があったの」
「ちょ、ちょっと待った！」

藤本は開いた右手を少女の方に向けてストップをかける。少女が怪訝そうに首を傾げた。

「……それって怪談？　怖い話になる？」

実は藤本、幼少の頃より変なことやモノに遭遇しては来たものの、怖い話にはめっぽう弱い。夏場の怪談特集があろうものなら光の速さで耳を塞いで音をシャットアウトするほどだ。

「怖くはならないと思うけど」

少女が笑いを堪えるような顔で返事をする。

「なら、いいよ。続けて」

自分が少しバカにされていることにも気づかず、藤本は出していた右手をどうぞの形に変えて話の続きを促した。

「その井戸は平安時代からのもので、当時は勿論、戦時中も、そして、戦後も大切に使われていたの。でも、このマンションが建てられることになって、その井戸の歴史もついに終わることになった」

「うんうん」

「ところが、その井戸がつくられた時からそこに住んでいた一匹の蜘蛛は、人間の勝手な行いを許さなかった。そこで蜘蛛はマンションの建設現場で様々な悪戯をしたの。おかげで怪我人が続出。次第にこれはなにかの祟りだと怯えて現場に顔を出さなくなる者も出始める始末で、工事もままならなくなった。困りに困った人間たちは慌てて御祓いをすることにしたの」

一向につるべとエレベーターの関連が見えないが、話の腰を折るのも悪いので藤本はただ相槌を打つ。

「この時に連れてこられたお坊さんが、中々話の分かる人でね。蜘蛛の言い分をちゃんと聞き届けてくれたのよ」

「蜘蛛の、言い分？」

「そ。蜘蛛が一番許せなかったのはね、いつも自分がくみ上げていたつるべがなくなったことだったの。人間が汲み上げるのを手伝ってあげてたのよ。カラカラカラって、滑車の回るあの音がその蜘蛛はとても好きだったの」

「はぁ」

「お坊さんの話を聞いた建設現場の偉い人が、それならば、井戸の

代わりに、このマンションのエレベーターを一つ差し上げましょう。これからはそのワイヤーを巻き上げていただけないか、ってね。そういうわけで、このエレベーターは私にとってのつるべになったのよ」

少女はどこか誇らしげな顔で話を締めくくった。

しかし、どうにも眉唾な話だ。そんな思いが顔に出ていたのだろう。少女が少しムッとしたように目を細める。

「あ、えっと、信じてないわけじゃないんだけど……蜘蛛に見えないなぁって思っただけ」

慌てて言い訳をする。

「この姿は神様の粋な計らいね。長生きするといいことがあるものよ」

「へー」

なんとか機嫌を損ねずに済んだらしい。藤本はホッとする。その拍子にあることを思い出した。とてもとても大事なことだ。

「あの……」

「なあに？」

「……そろそろ我慢の限界を迎えそうなんだけど」

羞恥に頬が熱くなるのを感じながら告白すると、少女は一瞬怪訝そうな表情になり、やがて、なにかに思い当たったように小さく口をあけた。

「ごめんなさい。すぐに動かすわ」

なぜか藤本と同じように頬を染めた少女は存外、あっさりとそう言ってくれた。その途端、エレベーターが動き始める。
カラカラカラカラ。少女が好きだと言っていた、滑車の音を上げながら。

藤本は唖然とその音を聞いていた。
やがて、エレベーターが止まり、ドアが開く。
かなり限界に近づいていた藤本は別れの挨拶もおざなりに廊下へ飛び出す。

「今日はありがとう。話に付き合ってくれて」

背中にそう声がかけられる。藤本の足は止まった。振り返ると、エレベーターのドアはまだ開いており中の光が外へ漏れていた。
なんだかぽつんとして寂しげだ。そんなことを思ってしまって――

「あー、うー、もう！」

藤本はぴょこぴょこ飛び跳ねながら引き返す。

「……忘れ物？」

引き返してきた藤本を見て少女が目を丸くする。藤本はぴょこぴょこしたまま話を切り出した。

「あのさー！　毎回は付き合えないかもしれないけど、我慢してない時だったら、また話しかけていいよ！」
「え？」
「私、藤本っていうの。あなたは？」

「……千歳」

「千歳ちゃん。それじゃ、そういうことだから」

またね、とまた会うことを示す別れの言葉を口にして、今度こそ藤本は自分の部屋へ向かって走り出した。

駅

電車を待っていたりすると、時々足を掴まれる。そういう時は、大抵、足首に変な手が絡まっているのが見える。稀に引っ張られたりもする。

けれどまあ、通過列車がくるタイミングで引っ張られたりはしないので、とりあえず害はない。

こういった現象は、子供の頃からよくあることなので気にしたりはしない。

ある時は水道の蛇口をひねったら真っ赤な血飛沫が出てきたこともあったし、授業中、ふと窓の外を見たらふよふよ生首が気持ちよさそうに空中遊泳を楽しんでいたこともあった。

大抵の場合、それらは他人の眼には見えていない。

だから、一々、大声をあげて騒いでいられない。

そんなわけで、藤本は今日も今日とて静かに電車を待っていた。

足首には青黒い手。大きさからして子供の手のようだ。

子供というのは厄介なもので、下手に動くと線路に引き摺り落とされそうな気がする。

藤本はどうしようかと頭を捻る。

次に来る電車を乗り過ごすと、バイトの時間に間に合わなくなる。

かといって、ムリヤリ、電車に乗ろうとして大丈夫だろうか？

これまでなにごとも起こらなかったから、今日もなにもないだろうなんて、保障はない。

かなりどうしようもない展開だ。藤本は溜息をつく。

平日の夕方だけあって、ホームには結構な数の学生と大人であふれている。この中の誰か一人くらい、藤本の足元に気づく人がいて

くれたら、と思う。
しかし、そんなことはなく、他人からはきっと藤本が意味もなく立ち尽くしているようにしか見えないのだろう。
いい加減、諦めているとはいえ、なんだかものすごい損を強いられている気がする。

藤本はもう一度足元に眼を向ける。相変わらず、がっしりと掴まれた足首。
どうしたものか、と考えていると電車がもうすぐ来る事を告げるベルが鳴り始めた。絡みついた手は離れる気配を見せず、藤本は今日一番深い溜息をつく。
バイトは遅刻。決定だ。そう諦めかけたその時――

「ふじもっちゃーん」

同じサークルの先輩が手を振りながら、藤本に走り寄ってきた。
周囲の視線が藤本に集まる。相変わらず、彼女はＫＹな人だ。藤本は顔を顰めつつもペコリと頭を下げる。

「同じ電車？　家こっちだっけ？」
「……今日、バイトなんで」
「そっかぁ。じゃ、途中まで一緒だね」

彼女はニコニコと話を進ませる。
一緒もなにもこっちは電車に乗れるかどうか分からないと言うのに。どうしたものか。藤本は再び考える。
そうこうするうちに電車がホームに到着した。

「ホラ、行こ」

彼女が立ち尽くす藤本を促す。

「あ」

彼女の足が藤本の足にかかっていた手を踏んづけた。
もちろん、見えていない彼女がそんなことに気づくはずもなく、
彼女は藤本の発した声に不思議そうに首を傾げた。

「ん？　どうかした？」
「……なんでもないです」

藤本は彼女と一緒に電車に乗り込む。
青黒い小さな手は、藤本の足があった場所で少しだけ指をピクピクとさせると、そのまま空気のように掻き消えた。

ちょっと可哀相だなと思った。

火の霊、プールへ行く

その日はアスファルトから湯気が立つほどに暑い日だった。
あちーあちーと犬のように舌を出しながら藤本は駐車場に止めていた車に乗り込む。
うっかり握ればヤケドしそうなくらい熱くなったハンドルにはとりあえず触れずにキーを差込み、エアコンが効いて来るのを待つ。
藤本はあまりの暑さでボーっとしていた。それが普段ならしないロックのかけ忘れを招き、さらには出会うはずのない人物を車内に招いたのだ。

「プールに連れて行け」

その女は藤本の車に乗り込んでくるなり、そう言った。

「は？」

突然のことに藤本は間の抜けた返事をした。

「今は夏だからな。プールに行くのが常識だろう。断れば、お前を焼き殺す」

女は偉そうな口調でメチャクチャな要求を突きつける。
しかし、藤本は女の言動より、およそ人間離れしたその容姿に圧倒されていた。
火の様に真っ赤な髪にルビーのように深い真紅の瞳。対照的に血が通っていないかのように真っ白な肌。

「聞いているのか？」

女の目が不機嫌に細められる。瞬間、チリっと何かが焦げるような音がすぐ目の前で――

「うわぁっ！」

微かに嫌な匂い。前髪が少しこげている。多分、ではなく、確実にこの女がなにかをしたのだろう。

大多数の人間が感知できないこういった不思議な現象には、いい加減慣れっこの藤本はそう判断する。そして、逆らわない方が吉だということも。

「私が本気だと分かったか？　焼き殺されたくなければ、プールに連れて行け」

「……はいはい」

「なんだ、そのやる気のない返事は」

「返事くらいどうでもいいじゃないですか。要はあなたをプールに連れていけばいいんでしょ？」

「……む、それもそうだな。頼んだぞ」

はいはい、とまたやる気のない返事をして、藤本はアクセルを踏み込む。

女は突然動き出した車に少し驚いたようだ。わわっ、と小さな悲鳴を上げる。そして、ぎろりと藤本をにらみつけた。

「急に動かすな」

「さーせん」

「さーせん？」

「すみませんの最上級言葉ですよ」

「そうか」

最上級という言葉に気をよくしたのか女は少し頬を緩めた。意外と単純らしい。女の機嫌がいい間に情報を引き出しておこう。藤本はそう考え口を開く。

「あの、あなたって人間じゃないですよね？」
「うむ、そうだな」

女は当然のように頷く。
どうして自分は人外のものをこんなに引き寄せてしまうのだろう？　藤本はげんなりしながらも質問を続ける。

「人間じゃないなら、なんなんですか？」
「火の霊だ」
「そうですか」

これまた当然のように言い切るので藤本も当然のように納得するしかない。

「どうしてプールになんか行きたいんです？」
「私は今恋をしているのだ」
「恋、ですか？」
「ああ。だから、プールに行かねばならん」

きっぱりと言い切る火の霊に藤本はポカンと口を開けた。
恋をしていることとプールに行くことの関連性はどこにあるんだ？
火の霊の説明はアバウトすぎて理解できない。

「あの」
「なんだ？」

「火の霊さんって、恋をしてるとプールに行きたくなるんですか？」
「なに馬鹿なことを言ってるんだ？　そんなわけがないだろう」
「じゃあ、どうして？」
「お前は本当に馬鹿だな」

ミラー越しに火の霊が呆れたように目を眇める。
それはこっちのセリフだと言いたいのを我慢して藤本は媚びるようにへらりと笑い、火の霊の言葉を待った。

「いいか、分かりやすくいうとだな、私が心を奪われている相手が水の霊なのだ。彼女はとても綺麗だ。是非とも、この恋を成就させたい」
「はぁ」
「それでだな、私は毎日彼女に燃えるような愛を送り続けたんだ」
「うへー、情熱的ですね」
「うむ。その甲斐あって、彼女もそんな私の気持ちにこたえてくれるようになった」
「おー、よかったじゃないですか」
「そこまではな。だが、火と水の間には海よりも深く山よりも高い問題が残っていたんだ」

そこでミラーにうつる火の霊の表情が少し陰った。ようやく本題に入るようだ。藤本は少しスピードを緩め、火の霊の話に意識を向ける。

「問題ってなんですか？」
「主に種族の違いだな」
「種族の違い？」
「ああ。彼女は自分と付き合っていくのならば、せめてプールに入れるようになってほしいと言った。私たちの交際を仲間に認めさせ

るには必要な通過儀礼だと」
「なるほど。だから、プールにってことかぁ」
「そういうことだ」

火の霊は難しい顔で頷く。
種族の違いが問題だと火の霊は言ったが、そんなことは最初から百も承知だろう。他にもなにか問題があるのだろうか？　そう考えて、藤本はふと疑問を抱く。

「あの、ちなみに火の霊さんはプールに入っても大丈夫なんですか？」
「大丈夫なわけがないだろう。自殺行為だ」

火の霊は難しい顔のまま吐き捨てるように言った。藤本は思わずブレーキを踏む。なぜ止まるのかと火の霊が不思議そうに首を傾げた。
しかし、藤本は今の今知らされたことに動揺を隠せない。このまま火の霊をプールへ連れて行ったら自殺幇助になってしまう。

「じ、自殺行為って分かってるならやめましょうよ」
「そうはいかん。今、私の愛が試されているのだぞ！」
「いやいやいや、死んじゃったら元も子もないでしょう。
それって、体のいい厄介払いなんじゃないですか？」
「なんだと！？」

聞き捨てならないというように火の霊が目を剥く。車内の温度が一気に上がったような気がした。
恐ろしさに藤本は身を竦ませたが「だ、だって、あなたが死んじゃうのが分かってて、そんなこと言うなんておかしいですよ。好きならなおさら、相手に危険なことなんてさせないと思う、んですけ

ど……」火の霊の顔色を窺いながら最後まで言い切る。

「そんなこと」

火の霊の声が震えた。

「そんなこと……言われなくとも分かっている」

真っ赤な瞳から一筋の涙が零れた。藤本は予想外の反応に戸惑う。

「だが、この気持ちは止められないのだ。たとえ彼女が嫌がろうとも、私は彼女の傍に居たいのだ！」

ぐいっと目元を拭い、そのまま拳をぎゅっと握りしめる火の霊。

それってストーカーなんじゃ？　と思わず言いそうになった藤本だが、火の霊のあまりの真剣な表情に口をつぐんだ。

「分かったら、連れて行け。プールだ、プール。我が命かけて、この愛を彼女に伝えてみせる！」

「いや、でも、死んじゃうと分かってて、みすみす連れて行くのは気が引けるんですけど」

「そんなことお前には関係なかろう」

「関係ありますよ。私、あなたが死んだら嫌ですもん」

もし、火の霊の言うとおりにすれば見殺しにしたも同然だ。人間相手ではないといえ、それはさすがに後味が悪い。

そう思って言ったのだが、火の霊はなにか勘違いしたようだ。真顔で藤本をじっと見据えるなり「お前、私に恋をしたのか？」と呆れたように言った。

「は？」
「お前の気持ちはありがたいが、人間と恋愛をするのはムリだ。なにしろ私がちょっと愛を囁いただけで、お前ら人間はこんがりと丸焼きになってしまうのだからな」
「えっと、あの……」

否定するべきか、この誤解を放っておくか。瞬時のうちに藤本は判断する。
火の霊をプールに連れて行かず、且つ、自分が焼き殺されない方法は、後者しかない。火の霊の身を心配したゆえでの反対ならば、いくらなんでも焼き殺すようなことはしないだろう。
藤本は意を決して口を開く。

「ま、丸焼きになると分かっていても、この気持ちは止められないんですよ。あなたが水の霊に抱く思いと一緒です」
「……お前、そこまで」
「はい。ですから、プールに行くのは」
「やめないぞ。プールには行く。これは約束だからな」

藤本の言葉を先読みして、火の霊はきっぱり言う。頑固だ。藤本は作戦の失敗を悟る。

「しかし、お前の気持ちも大事にしたい」
「え？　じゃあ」
「だが、約束はやぶれない。精霊界とはそういうものだ」

またもや先読みされた。
藤本はがっくりと肩を落とす。その肩にぽんと手が置かれた。火の霊を見ると優越的な笑みを浮かべている。

「案ずるな。お前の気持ちも大事にしたいと言っただろう」
「ええ……」
「要は私が死なないプールを探せばいいだけの話だ」
「はい？」
「お前は私のことが好きなのだろう？　ならば、それくらい出来るはずだ。そうすれば、私は約束を果たせるし、お前の気持ちも大事にしたことになる。頼んだぞ」

火の霊は無茶苦茶なことを当たり前のように言い放つ。
藤本は、いい笑顔の火の霊にグーパンをかまそうかと思ったが、おそらく返り討ちにされるだろうと、想像の中だけにおさめた。そして、律儀に考える。火の霊が死なずに泳げるプールがどこにあるかを。

「あの、温水プールでも死んじゃいますか？」
「温水とは温かい水のことか？」
「そうですけど」
「死ぬぞ」
「そうですか」

温水はダメか。他にプール。熱いプール。藤本はこれ以上ないというほど真剣に考える。
その姿に心うたれたのか「お前はいい人間だなぁ」と火の霊がしみじみと言った。

「はい？」
「他の者が好きな私のために、そんなに真剣になってくれるとは……」
「い、いえいえ、そんな大したことじゃ」
「いや、大したことだ。私には出来ん。好きになった相手には、自

分を一番に思っていてほしいものだ。そうじゃなければ、焼き殺してしまうだろう」

なんとも極端だ。もしかしたら、水の霊は火の霊の思いに応えたわけではなく、そういった性質を理解して、こんな約束を強いたのではないだろうか？

大きな火は水をも飲み込むというから、火の霊の思いの巨大さを水の霊が畏怖したとしてもおかしくはない。だとしたら、少し可哀相だ。

「火の霊さんって、なんでもかんでも焼き殺してしまうんですね」

「うむ、感情が昂ぶると制御が難しくてな」

少し恥ずかしそうに火の霊が目を伏せる。力の制御が出来ないことを恥じているのだろうか？

「ど、努力してみたらどうです？　力の制御っていうか、そういうことを」

「……ふむ。お前のために頑張ってみるか」

「え？　いや、あはは、別にいいんですけどね、私は」

「よくないぞ。私はお前が死んだら少し悲しくなるかもしれない」

「そ、そうですか」

「うむ。かなり悲しくなるかもしれないな。すごく悲しくなるぞ。そんな気がする」

「そ、そうですか。じゃあ、私を殺さないように頑張ってください」

「ああ、分かった」

火の霊の顔は真剣だ。ここまで信用されると心苦しい。

それ以上に、嘘がばれた時のことを考えると――藤本は背筋に冷たいものを感じて、ぶんぶんと首を振る。

悪い想像はしない方がいい。サイはもう振られているのだ。ここまできたら、自分が火の霊を好きだという、この嘘は最後まで突き通すしかない。そして、どうにか火の霊と平和に別れて生還を果たす。藤本が選べる選択肢はそれだけだ。

そのためにはプールだ。火の霊が死なないプール。なにかいい方法があるはずだ。なにか――

「あった！」
「なにがだ？」
「あなたが死なないプールですよ！」
「なに！？　本当か！？」
「ええ。早速、そこに向かいますよ」

藤本は火の霊の返事を待たずに車を発進させた。

※

「プールとは楽しいものだな、人間！」
「それはよかったですね」
「お前も一緒に泳がないか？」
「泳いだら死んじゃいますよ」

そうか、と少しがっかりしたように言った火の霊は、またばちゃばちゃと子供のように飛沫を上げて泳ぎ始める。

藤本はその飛沫が自分にかからないように気をつけることで一杯だった。万一、かかってしまったらヤケドどころじゃすまない。

藤本が考えに考えて見つけだした火の霊が死なないプール。それ

は人間にとっては危険極まりないマグマの海である。
周囲はむっとする熱気が立ち込め、非常に熱い。だらだらと汗をかきながら、藤本は楽しげな火の霊を見つめる。
人の気も知らないで、と思う反面、そのあまりにも屈託のない笑顔に、連れてきてよかったなという思いもあった。

「これで約束を果たしたことになりますね」
「そうだな」
「水の霊さんと上手く行くといいですね」
「いや、もうそれはいい」
「え？」
「約束は約束だから果たしたが、私の気持ちはもう変わってしまった」
「はい？」

なんだかとてつもなく嫌な予感がする。こんなに熱い空間にいるというのに、藤本は背筋に冷や汗が伝うのを感じた。
火の霊はマグマのプールから、にこにことこちらを見つめている。その口がゆっくりと厳かに開いた。

「私は今お前のことが気になる」

やっぱりだ。
今日、自分が火の霊に焼き殺されるという運命を変えることはできなかった。
一瞬、気が遠くなる。しかし「そんな顔をするな」苦笑いのような顔で続けられた火の霊の言葉に藤本は意識を引き戻された。

「力の制御が出来ないまま、人間のお前の傍にいることは出来ない」
「え？」

「努力をする。力の制御ができるようになったらお前を迎えにいく」

少し照れたようにぶっきらに火の霊が言う。

藤本にとっては救いの言葉。

「ホントですか！？」

「ああ。精霊は一度した約束は絶対に守る。これはお前と私との約束だ」

火の霊がマグマの中から小指を差し出す。指きりをしろということだろうが、ムリだ。

藤本が躊躇していると、火の霊は首をかしげた。

「これが人間界の約束の仕方じゃないのか？」

「あ、えっと、そうなんですけど……」

「お前は私と約束をしたくないのか！」

激昂に呼応するかのようにマグマがボコボコと沸き立つ。それは今にも藤本に襲い掛かってきそうだ。

「ち、ち、違いますよ！！　それ、触ったら、私、大怪我、です」

片言でなんとか火の霊に理由を説明すると、「なんだ、そうなのか」と、火の霊はすぐに怒りをおさめた。藤本は胸をなでおろす。

「約束はしてくれるんだな？」

「は、はい」

「私は力を制御する。お前は私を待つ。約束だ」

妙なことになったが、ここで断ることは出来ない。藤本は、コク

リと頷いて了承する。
なるべくなら、火の霊が力を制御できるようになるまでに自分の寿命が真っ当に終わっていることを願いながら――

印度人もびっくりのカレー

テレビ番組の影響なのか、それとも雑誌の影響なのか、印度人もビックリのカレーを作ろうと大学の先輩である青田が言い出したのは三ヶ月前のことだ。

カレーを作るには、本場印度をまわって修行という短絡的思考の元、お供として無理矢理、印度へ連れて行かれた藤本は、強い日差しできめ細やかな肌が荒れたらどうしよう、と不安を覚えた。

さて、カレー修行の旅は西印度からはじまった。

朝は屋台というのも忍びないほど、こじんまりした店で売っているサモサという料理を食す。これにはカリッと揚げられた小麦粉の皮の中にスパイスで味付けされたポテトの炒め物が入っている。

青田は、この料理に使われているスパイスの名称を店の人に聞いていた。勿論、ヒンドゥー語など話せないので身振り手振り。詰め寄るその姿は、まさに鬼だった。

次に赴いた首都デリーのある北印度で青田は、メイン・バザールと呼ばれる賑やかな通りに並んだスパイスショップのスパイスを麻袋ごと買い占めるという暴挙に出た。これには印度人が日本人にビックリである。

当然、麻袋を持って歩くのは藤本で、あまりの暑さと麻袋の重さに少し頭がショートした藤本は体に食い込む縄の痕がなかなかセクシーに見えるんじゃないかと変態気味なことを思った。

所かわって東印度カルカッタ。降りた駅のホームに立ち食いカレーの店があった。

味は、西や北で食べてきたカレーとは一味も二味も違っていて、

これは日本じゃ受けないからダメだね、と青田は首を振った。
微かにマスタードの香りがするそのカレーは、確かにあまり日本人には受けないだろうなと藤本は思ったが、印度人をびっくりさせたいのなら、別に日本人への受けなんて関係ないんじゃないか、と青田の発言に少し首を捻った。
この時既に、青田の目的が印度人をびっくりさせるカレー作りから、日本人に受ける本格印度カレーのお店を建てることになっていたことなど、当然、藤本が知る好もないことだった。

最後は灼熱の南印度。カルカッタから南へ下る電車に乗って数時間。
車窓には水田が果てしなく広がっており、途切れる気配さえなかったが、終わらない電車の旅などない。
目的地チェンナイの駅に到着して、二人はてくてくと歩き出す。

「これで旅も終わりだね」
「そうですねぇ」
「店はどこに建てようか？　藤本、いい場所知らない？」
「……店って？」
「あ、レストラン発見。お昼あそこで食べよ」

藤本の疑問をするりと潜り抜けると、青田はレストランの門をするりと潜る。待ってくださいよ、と藤本はあわてて彼女の後を追いかけた。

ウェイター二人で切り盛りするレストラン。
一人はご飯を、もう一人はおかずを持っている。どうやら合図をするとサーブしてくれるシステムのようだ。
藤本たちの目の前にはお皿代わりのバナナの葉が置かれている。

「なかなか風流だね。でも、日本でこれをしようとしたら赤字になりそう」
「……はぁ」

藤本は怪訝な顔で頷きながら、右手でご飯をつまむ。印度での食事ルールにもそろそろ慣れてきたところだ。
印度に着いたばかりの時は、右手全体を汚してしまい、笑われたりもしたものだが。こんな日本では使い道のないギミックを取得しても――思いながら食事を勧めていく。

「それで、青田さん……印度人もびっくりの特製カレーは作れそうなんですか？」
「ん？　そうねぇ……よく考えたら、本格的なカレー屋さんって、もう東京にはあるよね」
「は？」
「失敗しちゃったなぁ……」

青田は、はぁと溜息をつき、藤本は、は？ともう一度言った。

このお姉さんは今なにを抜かしやがりましたか？

藤本は呆然と青田を見る。

「あ、そうだ！」

落胆からすぐに復活した青田が元々大きな目をさらにぎょろりんとさせる。
そうして、はじまったまるで宇宙からのメッセージのような支離滅裂な演説に、藤本のコメカミからたらーと汗が流れた。
それは、カレースパイスによるものか、はたまた暑さによるもの

かそれとも、これから青田が発するであろう言葉について藤本の本能が危険を告げているのか。ともかく、たらたらと汗が止まらない。
髪を振り乱し、手を振り回し、青田の演説はまだ続いている。
いつの間にかカレーの話からチーズの話になっているのは気のせいだろうか？
現実逃避をしていた藤本がそのことに気づいた時、青田がくわっと叫んだ。

「だから、印度人もびっくりじゃなくて、ハイジもビックリのチーズを作ろうと思うの！」
「……ハ、ハイジ？」
「そうと決まったら、目指せアルプス！！」

ガシッとカレールーのついた手で腕を掴まれて、藤本は引き摺り刑を受ける罪人の如く、印度の地からアルプスに連れて行かれるのだった。

眠れぬ夜

藤本が人の世に在ってはならないものを見始めたのはいつの頃だったか。物心着く前から、もうそうだったような気もする。

小さい頃、夜中にふと目を覚ますと見た事のないお婆さんが枕元にちんまりと座っていて、藤本が眠るまで優しい子守唄を歌ってくれていた。

大きくなってから、両親にその話をするとそんなお婆さんなんて知らないと言われた。夢でも見ていたんでしょう、と。

けれど、お婆さんは確かに居たのだと藤本は思っている。あれだけ毎日会っていたのだ。夢のはずがない、と。

そんなわけで藤本は小さい頃から、自分でも気づかないうちに人よりも人ではないものと触れ合うことが多々あったわけだ。だから、覚悟は出来ていた。一人暮らしをすると決めたその日から――新たな出会いがあることくらいは。

「この頃元気ないよね。なにかあったの？」

ベッドに寝転がって数度目の溜息を吐いた所で、隣で横になっていた少女に心配そうに問われた。藤本は力なく笑う。

「あんまり寝つけなくてさ……」

藤本の答えに少女はそれは一大事だといわんばかりに眉を寄せた。

「なにか悩みでもあるの？　あたしでよかったら聞くけど」

「……優しいね」

ぼやくように返すと少女は少しはにかんだ笑みを浮かべた。
可愛いんだよねぇ、顔は――藤本の寝不足気味の頭はくだらない感想を述べる。そんな自分に呆れつつ、藤本は寝返りをうち少女に背を向けた。

「安いと思ったんだよね」

溜息とともに言葉を吐き出す。

「え？　なにが？」

少女が疑問符を背中に投げてくる。

「この部屋の家賃。この辺の相場よりものすごく安かったんだ」
「安いにこしたことないじゃない」
「そりゃね。だから、部屋を見て、すぐここに決めちゃったんだ」
「うんうん。それで？」

話に興味津々といわんばかりに少女が首を伸ばして藤本の顔を覗き込んでくる。少し気持ちが悪い。
藤本は仕方なくもう一度寝返りを打ち、少女の方に向き直った。

「それが失敗だったんだよ。安物買いの銭失いっていうか、安かろう悪かろうっていうか、中国製っていうか韓国製っていうか、そんな感じ」
「失敗？　なんで？　どこが？　なにが？」

意味が分からないという風に少女が部屋をぐるりと見回す。
室内はシンプルながらも快適な生活をモットーにインテリアを配置してある。白い壁に映えるようにと揃えた焦げ茶の家具類も我な

がらいい感じだと藤本は思っている。
少女もそう思ってくれたのか「めちゃくちゃいい部屋だと思うよ。お洒落だし」と首を傾げながら口にした。

「うん、部屋の雰囲気はね、自分でも自信あるんだ」
「じゃあ、なにが問題なの？」
「……出るんだよ、ここ」
「なにが？」
「幽霊」

分かってくれと懇願するような眼差しで藤本は少女を見つめる。
少女はポカンと口をあけてマジマジと藤本を見つめ返してくる。まるで今の藤本の言葉が真実か否かを探っているようだ。
だが、藤本の目の下にうっすら出来ているクマや疲れきった表情に一応は信じることに決めたらしい。ただ半信半疑なのはどうしても隠せないようで「……あたしがここに住んでた時はそんなの全然出たことないけど」と小首をかしげる。

「そうなんだ」
「どんな霊が出るの？」
「前に住んでた人なのかなぁ。夜になると出てきて喋りかけてくるんだよね。この部屋見に行った時は昼間だったからぜんぜん気づかなかったんだ……」
本当に迂闊だった。初めての一人暮らしに高揚していたとはいえ抜かったものだ。藤本は心底から後悔の溜息をつく。
「なるほどねぇ」
少女は体を起こし胡坐をかいてこの問題を解決する名案がないか

と頭をひねっているようだ。その姿は少し滑稽に藤本の目には映る。
「大体、そういう居残っちゃう霊っていうのは、悔いを残して死んだ場合が多いって言うよね。その悔いをはらしてあげたら幽霊いなくなるかもよ？」
「悔いねぇ……」

藤本は少女をじっと見つめる。その顔には邪気など微塵もなく、本気でそう言っていることが窺える。やっぱり滑稽だ。
「ねぇ、幽霊はどんなこと言ってくるの？　そこにヒントがあるかも」
「どんなことって……滑稽なことだよ」
「滑稽？」
「なんていうか、的外れなアドバイスしてくれたり」
「アドバイス？　……なんだかあんまり悪い霊じゃなさそうだね」

確かに悪意は全くないのだろう。ただひたすらに勘違いをしているだけで。
藤本は「まあね」と頷く。

「その霊は男の子、女の子？」
「……女の子」
「どんな子？　可愛い？」
「そんなのどうでもいいじゃん」

どちらかといえば可愛い部類に入るだろうが。どうでもいい気持ちで一杯になってきた藤本はおざなりに答える。
その態度をどう受け取ったのか少女は「そうだね」と素直に頷くと、急に背筋をしゃんと伸ばし正座をした。

藤本はそんな少女をキョトンと眺める。

「どうしたの？」

「その子に悪意はなくても実際に害は出てるんだから然るべき処置をしないと」

「然るべき処置って？」

「除霊よ、除霊！　かわいそうだけどそうするしかないでしょ」

少女は完全に完璧に真剣で本気の目をしている。あまりの滑稽さに藤本はついに噴出してしまった。

一度笑ってしまったらなかなか止まらない。暗い部屋に響く笑い声を少女が呆気に取られた表情で聞いている。

しばらく黙って藤本の笑い声を聞いていた少女はやがてキュッと眉を吊り上げた。

「……嘘だったんだ」

「ん？」

「幽霊がいるなんて言って、あたしをからかってたんでしょ。どうしてそういうことするのよ」

嘘なんて一つも吐いていないし、からかってもいない。

だが、そう言ったところで少女のぷくぅっと膨らんだ頬を元に戻すのはムリだろう。それにタイムリミットはもうすぐだ。長く騒がしい夜はもうすぐ終わる。少女の機嫌を直そうと無駄な労力を使うよりも無難にやり過ごした方が懸命だ。

「あー、はいはい。ゴメンゴメン。悪いけど寝かせて。真面目に眠たくなってきた」

いい加減な調子で謝罪して藤本は頭から布団をかぶる。

「ちょっと！　まだ話は終わってないでしょ！」

少女の怒りの声とともに肩の辺りが妙に重たくなってくる。ゆさゆさと体が揺さぶられる。

そのあまりのしつこさに放っておくことも出来ず、藤本は目元だけ布団から外に出す。待っていたかのように少女が口を開いた。

「一体全体どういう理由があって、あたしにくだらない嘘を吐いたのか、教えてもらいましょうか」

少女は依然頬をぷっくりさせ不機嫌な顔をしている。

それを無視して藤本は時計を探す。丁度、少女の体の後ろに隠れて時間が確認できない。

「ちょっと聞いてるの？」

「……ねぇ、今、何時？」

「今？　えっと……って話を逸らさないで」

「何時か教えてくれたら理由教えるから」

「絶対？」

「絶対」

「絶対よ。絶対だからね」

しっかりと念押しして少女が時計に視線を飛ばす。

「えーっと、あとちょっとで４時になるわ」

「そう。じゃあ、もうすぐだね」

「なにが？」

「君が静かになるのが、だよ」

藤本の言葉に少女が首をかしげた瞬間、その姿がパッと掻き消える。

時計の針はきっかり４時を指し示している。

藤本はようやく静かになった部屋でほぅっと一息つくと落ちてくる瞼に逆らわず目を閉じた。

キャトられ

未確認飛行物体、宇宙人は実在した！？

タイトルからして胡散臭い特別番組を真剣に見ていたあやめが思いついたように藤本に言った。

「もっさんってさぁ、たいがい変なことに巻き込まれてるじゃん？　実は未知との遭遇も済ませちゃってたりして」

まるでファーストキスを済ませているのか聞くような軽い調子だ。しかし、それは藤本にとって軽い調子で聞かれていいようなことではなかった。

藤本は苦虫を噛み潰したような顔で黙り込む。

「え？　ちょっ、なんでそんな顔なんの？　冗談だよ、冗談」

「……」

「……もっさん、マジ怒ったの？　悪気はないよ、ホント」

部屋に漂いはじめた重苦しい空気を察して焦るあやめに藤本は溜息をつく。そうして「高校の修学旅行、覚えてる？」と、重たい調子であやめに尋ねた。

「え？　う、うん」

「あの時さぁ、一瞬、私、行方不明になったでしょ？」

「……そうだったっけ」

あやめが頭の奥底に眠る記憶を探るように目線を上に上げ、少しの間の後「あー、あったね、そんなこと」と、うんうんと頷いた。

「なんでか私がもっさんになにかしたんじゃないかって先生たちから疑われたんだよ。どこ行ってたのさ、一人で」

その時の情景を思い出したのかあやめが少し文句交じりの口調になる。

「どこだろうねぇ？」

あやめの文句など、どこ吹く風で藤本は呟く。

藤本がふざけていると思ったのかあやめがムッとした顔になった。話の流れでどういうことか気づいてもよさそうなのに、と思いながら藤本は肩を竦める。

「自分でも本当に分からないんだよ、あれがどこだったか」

「あれって？」

「……さぁ？」

「もっさん！」

いよいよムッとするあやめに藤本は乾いた笑みを浮かべる。

「覚えてるのは変な生き物だけなんだよね」

「変な生き物？」

「うん。どう言ったらいいのか分かんないけど、とにかく変だったんだ。ぶにょぶにょしてるのに硬くて、冷たいのに熱くて」

あやめがマジマジと藤本を見つめる。そういえばこれも覚えがあった。藤本は思い出して付け加える。

「目みたいなものはないのに、こっちの体の中までじっくり覗かれ

てるみたいな……」
「ねぇ、それエッチな話？」
わざとふざけたのか、あやめが口を挟んだ。藤本は口元だけで小さく笑んで頭を振る。
「違うよ」
「だよね」
あやめがゴクリと息を飲む音が室内に響く。
なにを言ったらいいのか分からないのかあやめは黙ったままだ。
あやめにしたら、ウソから出たまこと、いや、ひょうたんからこま、といったところだろう。その反応も理解できる。
藤本は笑んだまま口を開いた。
「実験動物ってこんな気持ちなのかなって思った」
「……」
「……」
「……で、でも、あれでしょ？　あの、特に体になんかあったとか、そういうあれはないんだよね？　大丈夫だよね、もっさん」
『あれ』とか『なんか』とかあやふやな言葉が多いのは動揺しているからだろう。ただあやめの言葉には藤本を心配する響きが多分に含まれている。
だから、あやめを安心させてやりたいのはやまやまだったが――
「帰りの飛行機、覚えてる？」
「え？　う、うん」
質問の意図が分からなかったのかあやめは少し首をかしげ、そし

て、ハッと目を見開いた。
きっとその時の光景を思い出したのだろう。
事情を知らなかったあやめはその時ケラケラと笑っていたが、事情を知った今はその思い出は笑い事じゃなくなってしまったようだ。
藤本は頷き「あの日からずっと金属探知機に引っかかるんだよね」遠い目で呟いた。

屍体と暮らそう　1

思い返せば、幼馴染のあやめは、昔から藤本を驚かせるのが得意だった。

幼稚園の頃、登園してきた藤本を見つけて、二階の窓から「いやっほぅ！！」と叫びながら飛び降りてきたのなんて序の口。

小学生の頃、藤本がクラスの一部の女子たちから軽い嫌がらせを受けているのを知るなり、包丁を持ち出して生死をかけた鬼ごっこをはじめたり――思い出すだけでもぞっとするようなことばかりだが、今日という日ほど、驚かされたことはないだろう。

『超びっくり人間見せてあげるから、うちにおいで』

そんな連絡が入ったのは朝も早くのこと。嫌な予感はしていたのだ。根拠はないが、ただひたすらに嫌な予感だけがした。

それでも、あやめが一人暮らしをしているアパートに足を運ぶ気になったのは『ついでに借りてたお金返すから』と彼女が付け加えたから。

気乗りしないながらも藤本はあやめの住むアパートへ足を運んだ。

季節は冬。吐き出す息は白い。悴む指先を擦り、ノックを二回して藤本は返事も待たずにドアを開けた。

部屋にいてもいなくても、あやめが部屋の鍵を開け放していることを知っているからだ。無用心だと何度も忠告したが、一向に直す気配が見られないのでもう諦めてしまった。

「あやめー？　私だけど」

玄関から中を覗き込んでも人の姿は見えない。
あやめの部屋は昔から物が異常なほど少ない。だから、身を隠す場所などないはずなのに部屋の主の姿は見当たらない。
藤本が首をかしげていると「おーおー、早かったねぇ。ウェルカムマイルーム」妙なテンションのあやめが玄関横の台所から顔を出した。
丁度、壁で仕切られているので姿が見えなかったのか、と納得して藤本は部屋の中に上がりこむ。

「珍しいじゃん、料理してるの？」

メッタなことで料理をしないあやめが台所に立っているなんてどういう風の吹き回しなんだか。藤本は笑いながら問いかけて、台所にいるあやめに視線を向けた。そして、固まった。
あやめはにこにこしている。その頭にはなにか大きな破片が突き刺さっていて、頬には幾筋もの赤い液体が流れている。まるで血の涙みたいに。

「……ちょ、ちょっと、聞いてもいいかな？」
「どうぞ」
「……あの、その、頭に刺さってる、それなに？」
「車のヘッドライト」
「……そっか。それで、えっと、どうなってんの？」
「私がビックリ人間になってる」
「いや、確かにビックリだけど……なんなの？」

問いかけに飄々と答えるあやめに思わず眉間に皺が寄ってしまうのが自分でも分かる。そんな藤本の顔を見て、あやめが満足そうに笑い、口を開いた。

「実は、私こと宮下あやめは死んでしまったようなんですよ」
「……いや、生きてんじゃん。私と今普通に喋ってるし」
「ところがどっこい、心臓が止まっちゃってるんだよね」

あやめは自分の胸を触ってみろというようにポンポンと叩く。
藤本はその誘いに乗ってゆっくりあやめに近づき、そっとその胸に手を触れてみた。小さい、ではなく動いていない。
藤本は愕然とした表情であやめを見る。

「ほら、ね？」

あやめは、どうだと言わんばかりに勝ち誇った表情で笑った。
笑い事じゃない。一体、なにがどうなっているんだ。藤本はまじまじとあやめを見つめる。

「じょ、冗談でしょ？」
「残念なことにこれマジなんだよね」

あやめはへらへらした顔のまま肩を竦める。緩みきった表情は生前そのままで悲愴感の欠片も感じられない。
だから、やっぱり、どうしたって、これがあやめの仕組んだドッキリなのだと思ってしまう。

「……最近の特殊メイクってすごいね」
「は？」
「本物みたいだし……それに、あやめ、心臓止める特技なんていつ身につけたの？」
「はい？」
「もう十分驚いたからさ、そろそろ普通にしてよ。軽く気持ち悪いんだけど、その赤いとこ」

そう言って藤本がムリヤリに笑って見せると、ぽかんと口を開けたままにしていたあやめは「いや、これが今の私の限界に普通な状態なんだけど？」と言った。

※※※

あやめに繰り返し説明されること1時間。藤本はようやくあやめが本当に死んでいることを信じる気になったが、どうしても疑問が残る。

「結局、今のあやめの状態ってなんなの？　幽霊にしては触れるし、微妙に生温かいし」

「うーん、私に聞かれてもなぁ。もっさんならその答えが分かるかと思って呼んだんだけど」

なるほど。昔から藤本が変なモノやことに遭遇しているのを知っているだけにあやめはそう思ったのだろう。

しかし、さすがの藤本も心停止した人間が、体を動かしたり、喋ったりするところを見るのは初めてだった。

藤本は首を小さく横に振る。

「悪いけど、私にも分かんないよ」

「そっかぁ」

あやめが少し落胆したように肩を落とした。藤本も釣られて肩を落とす。

「これからどうすんの？」
「んーそうねぇ……とりあえず、もっさんの世話になるとして」
「は？　なんで？」
「昔からの付き合いじゃん。困った時はお互い様ってね」

藤本が困っている時にあやめが助けてくれたことなんてあっただろうか？　そんな疑問が浮かんだが、藤本は気にしないことにした。気にするとなんだか嫌な思い出を思い出してしまいそうだから。
それに、そんなことよりも最も根本的なことを聞いていないことを思い出してしまった。
彼女がいつこうなってしまったのか？　藤本は口を開く。

「ところでさ、いつからそうなったの？」
「さぁ、いつでしょう？」

なんでもないような顔をしてあやめが首を傾げる。この状況でふざけてるのか、と藤本が睨みつけると、彼女は少し身をちぢ込ませ
「……ホントに覚えてないんだってば」と言った。

「……私に電話してきた時は、もうそうなってたんでしょ？」
「うん。マジビックリした」
「そうなる前のこと覚えてないの？」
「うん。やっぱあれかな、頭の怪我だし、打ち所が悪かったとかなのかな？」
「知らないよ、そんなの……」

藤本は嘆息する。どうしてこうも危機感がないのか。こういう奴だから、きちんと死ねずに半死体なんかになったんじゃないだろうか？　藤本は思う。
あやめがまともな神経をもっていたら、きちんと死ねていたはず

だ。
　けれど、普通、死んでしまった人とは二度と喋る事が出来なくなるのに、今こうして何事もなかったかのように会話が出来ているという事を考えると、あやめがまともな神経を持っていなくて良かったと思うべきなのかもしれない。前向きに考えよう。藤本は小さく頭を振り、あやめを見る。そして「……まずは顔洗ってから、それ抜いちゃおうか？」と、あやめの頭に刺さった大きな破片を指差した。

※※※

　顔を洗ってさっぱりした途端「死ぬ前に私の歴史めぐりしたい」とあやめが言い出した。

「もう死んでるじゃん」

　そう突っ込みを入れつつも、藤本はなにか思い出すきっかけになればと思い、あやめに付き合って歴史めぐりをすることにした。
　歴史めぐりと言っても大したことはない。通っていた学校に行ってみたり、よく寄り道をしたコンビニに行ったり、あやめの行きたい場所なんてそんなところくらいだ。
　ちなみにあやめには、破片を抜いた後の傷口というか凹んだ部分を隠すために包帯をぐるぐるに巻いて、帽子を目深に被らせてある。かなり怪しく、そして、暑そうな格好だ。
　しかし、そうしていないと道行く人の注目を浴びすぎる。そうしていても、若干、注目を浴びているが、藤本は気づかない振りをした。

「……あと、どこ行くの？」
「うーんと、あ、ジュクジュク」
「ジュクジュク？」
「塾だよ、塾。講師してたの」

なんとまぁ――藤本は驚きを隠せずに口を開けた。
あやめが人に何かを教えるなんて世も末だ。そんな思いが顔に出ていたのか、あやめが不満げに眉を寄せる。

「こう見えて、あやめ先生の授業はかなり分かりやすいって評判なんだからね」
「マジで？」

ますます世も末だ、と藤本は思いながら「で、どこにあるの、その塾」とあやめに訪ねる。

「駅前の南口の方」
「あー、あそこ？　あそこってちょっと怖くない？」
「そう？　なんで？」
「なんか人通り少ないじゃん。暗いし。ぶっちゃけ、事故とか多発してんだよね」
「よくそんなこと知ってるね」
「あそこ通るとたまに声かけられるんだよ、事故でさよならしちゃった人から」
「あぁ、それは怖そう」

あやめがクスクスと笑う。
藤本にとっては笑い事ではないのだが、あやめを睨みつける。と、なにかが藤本の頭の片隅を通り過ぎた。自分が口にした言葉に妙な引っ掛かりを感じたのだ。

藤本は足を止める。そのことに気づかず数歩先に進んで、あやめが不思議そうに振り返った。

「……どうしたの？」

「いや、なんか……今、ひらめきかけたんだけど」

「なにを？　世紀の大発明？　ノーベル賞取れそう？」

「取れないと思うけど……」

なにに引っかかったのだろう？

藤本は難しい顔のままあやめを凝視する。そして、思い当たった。

「っていうかさ」

あやめの頭に刺さっていたヘッドランプの破片。つまり、それはあやめが車に轢かれたということに他ならない。

「昨日、塾あったの？」

「ん？　うん、あったよ」

「それ、何時ごろ終わった？」

「えーっと、１０時に終わったけど、そのあと講師仲間と飲み行った」

「それで？」

「それで？　えっと……気づいたら朝だったから、家に帰って、鏡見てびっくりしてもっさんに電話した」

「やっぱり」

藤本は納得する。

あやめは塾の講師仲間と別れた後、この近くで事故に巻き込まれたに違いない。そして、その時に死んでしまい、どういう理屈でそうなったのかは分からないが生き返り、自分が死んでいることにも

気づかないまま家に帰ったのだろう。
もちろん、これは憶測に過ぎないが、真実とそれほどずれはないと思う。
思いついた推論をあやめに伝えると「はぁー、なるほど。そういう考えもあるね」と、彼女は感心したように頷いた。

ともあれ、そんな話をしているうちに駅についていた。
南口に向かうため、一旦、構内に足を踏み入れる。
まだ帰宅ラッシュに巻き込まれるような時間じゃなくてよかったと思うべきか否か。横を過ぎる人がたまに不審者ルックのあやめを見ていく。あやめが気づいていないのが幸いか。とにかく早く外へ出ようと藤本は足を速めた。

屍体と暮らそう　2

ともあれ、そんな話をしているうちに駅についていた。
南口に向かうため、一旦、構内に足を踏み入れる。
まだ帰宅ラッシュに巻き込まれるような時間じゃなくてよかったと思うべきか否か。横を過ぎる人がたまに不審者ルックのあやめを見ていく。あやめが気づいていないのが幸いか。とにかく早く外へ出ようと藤本は足を速めた。

南口へ出ると急に静かになった。
元は小さな商店街だったそこの店舗はほとんどがシャッターを閉めており昼間だと言うのに人通りも少ない。その中に一つだけ、異質に感じる綺麗な建物があった。
窓には○×高合格者5人。△◇高合格者8人などと書かれた張り紙がびっしりと張ってある。どれもこれも名門と呼ばれる学校ばかりだ。

「結構、レベル高いんだね」
「うん」

あやめが入り口をじっと見つめたまま、心ここにあらずといった風に頷く。

「どうかしたの？」
「……なにかがここにひっかかって、あーうー」

苛々したようにあやめが頭を抱えた。帽子がずれて包帯が見え隠れする。藤本は慌てて、あやめの頭を押さえてずれた帽子を直した。
その衝撃がよかったのか「分かった！！」と、あやめが大きな声

上げた。

「な、なにが分かったの？」

「私、昨日、塾講やめたんだった」

「は？」

なにを唐突に言い出すのか、藤本は目を丸くする。

「塾長が軽くストーカーチックで超絶キモくて耐えられなくなって……」

「マジで？」

「うん……」

「それって確定じゃん」

犯人が、と口にしなくてもあやめには伝わったようだ。「なのかなぁ？」と首を傾げる。その目がなにかを見つけて見開かれた。

あやめの視線を辿ると、なるほど、見るからに超絶キモいオヤジが塾の入り口でなにやら作業をしている。あれが塾長だろう。

「……あいつか」

藤本は塾長を睨みつける。急激に怒りが込み上げてきた。

あやめをこんな身体にしておきながら、ノコノコと仕事場に出ている神経が信じられない。どうしてやろうかと考えていると、不意に腕になにか温かいものが絡みついた。

「あ、あやめ？」

見ると、あやめが不安げな顔で藤本の腕にしがみついている。

「ど、どうしたの？」
「だって……私、また殺されるかもしれないじゃん。さりげになにげに怖いよ」
「……あやめ」

もう死んでいる状況なのだからまた殺されることはないと思うが――藤本はそれを口には出さず、あやめをそっと抱き寄せる。

「大丈夫だよ。私がついてるから」
「……もっさんって変な時だけ頼りになるよね。さすが年中トラブル背負い込み女」
「それ、ほめてる？」
「どっちかな？」

いまだ不安げなままだがあやめが小さく笑う。藤本も笑みを返し、塾長に視線を戻した。

「……どうしてくれようかな」

こちらに背中を向けている塾長は無防備そのものだ。
よし、と藤本は心の中で気合を発し、塾長に向かって走り出した。
足音を聞きつけたのか、塾長が振り返る。だが、遅い。藤本はすでに飛び蹴りの体勢に入っていた。

「相手が人間なら怖くないんだよっ！！」

ゴスッという鈍い音と共に塾長が蹲る。

「……き、きさま、いきなりなにを」

苦痛に顔を歪ませ、脂汗を浮かべながら塾長が藤本を見上げる。

「自分の胸に聞いてみろ！」

藤本が怒鳴りつけるのと同時に「ちょっともっさん！」と慌てたようにあやめが駆け寄ってきた。

塾長の傍に寄りたくはなかったのだろうが、藤本の纏う殺気に止めに入らざるをえなくなってしまったようだ。

そんなあやめの顔を見て、塾長の顔色がサァッと面白いように青褪めた。

「……どどど、どうして、どうして生きてるんだ？」

その声は震えていた。塾長は声同様にガタガタ体を震わせながら後ずさりしていく。

この反応、やっぱりこいつがあやめを殺した犯人だったのだ。

殺したと思ったはずの人間が平然と動いていたら、変なことに慣れていない人間にとってはそれはそれは恐ろしいことだろう。

「生きてないよ、死んでるよ！」

あやめがどうでもいいことを言い返す。

塾長は聞いていないのか、どうしてどうしてと錯乱したままだ。

藤本は舌打ちをして、塾長の頬を叩く。一瞬、呆気にとられた顔をした塾長の瞳が焦点を結んだ。

「どうしてあやめを殺した？」

「……じ、自業自得だ」

「どういう意味！？」

「俺の愛情に気づいていながら、塾をやめると言い出した。だから、

勝手なことが言えない様に少し躾けてやっただけだ！　俺は悪くない！　悪くないんだ！」

滅茶苦茶な自己弁護。こんな勝手な言い分があるだろうか。藤本は怒りのあまり言葉を失う。

静寂が落ちかけたその時

「……ふざけんなーっ！」

あやめが怒鳴った。塾長がひぃっと身を縮こまらせる。

「そんな勝手な理由でこの前途有望な輝かしい未来ある私を殺すなんて……」

ざっと足音を立てて、あやめが塾長に近づく。

一歩、また一歩。

「ちょっ、あ、あやめ」

藤本はあやめの纏う殺気に気づいて慌てて彼女を止めようと腕を掴む。ギロリと鋭く睨みつけられた。そのあまりの迫力に「あ……えっと、ほどほどにね」藤本は掴んでいた腕を離し、あやめを送り出す。

あやめがまた一歩近づく。塾長は目の前。

怒りをコントロールするかのように息を吸って吐いて、あやめがその腕を振り上げた瞬間、塾長は「うわぁーっ！」と叫んで脱兎の如く走り出した。

「え！？」

あまりの速さに追いかける足が出遅れたあやめを置いて「任せて！」と藤本は走り出した。
特別、足に自信があるわけではないが、確実メタボの超絶キモオヤジの塾長に追いつけないわけがない。グングンと藤本と塾長の距離は狭まっていく。手を伸ばせばすぐの距離。当然、藤本は思いっきり腕を伸ばす。

「つっかまえたーっ！！！」

塾長の腕を掴んだと思ったその手は空を切った。塾長がドリフトターンをしたのだ。

「うわっ！」

藤本はバランスを崩して派手にこける。視界の片隅に「バーカバーカ」と子供のように藤本を指差し笑い逃げる塾長の姿が。

「ぐっ！」

藤本はぎりっと歯噛みして、すぐさま追いかけなおそうと立ち上がる。しかし、どこか痛めてしまったのか足に力が入らない。

「もっさん、大丈夫！？」

遅れて追いかけてきたあやめが藤本に駆け寄ってきた。

「あ、うん。平気だけど……逃げられちゃった、ごめん」
「もっさんが大丈夫なら、それでいいよ」

あやめが手を差し出してくる。その手を取って立ち上がったその

時。

「もっさん、危ないっ！！」

あやめが藤本の背後を見て悲鳴にも似た叫び声をあげた。

「え？」

あやめの視線を追って振り返った藤本はぽかんと口を開ける。

我ながら間の抜けたリアクションだと藤本はどこか冷静に思った。けれど、それ以外にリアクションのしようがないのも事実だった。

塾長の運転する車が迫ってきている。避ける時間はないかもしれない。

そう悟った時、藤本は無意識に後ろにいたあやめの身体を庇うように手を広げていた。

世界の全てがスローモーションのようにゆっくりと動き出す。これが、死の前兆。藤本はその間に様々なことを思い出す。

幼い時、いつも子守唄を歌ってくれた実の祖母でもない体が透けて見える老婆。一人暮らしを始めた時、数ヶ月くらい一緒に暮らした自分が死んでいることに気づいていない少女の幽霊。夏に出会った火の精霊に、エレベータで仲良くなった元蜘蛛の女の子。ホームに突っ立っていると足首を掴んで動けなくする悪戯好きの子供。なぜか誰かが邪魔をして渡るのを困難にする交差点。手にした者をボンバへにする不思議な鞠。

バンパーがゆっくりと藤本に迫り来る。

ろくな思い出がなかったことに少しだけ落胆しながら、藤本はぎゅっと目を瞑った。

衝撃は一瞬。思っていたより強くなかった。

どこかで誰かの悲鳴が聞こえた。
気がついた時には道路に倒れ込んでいた。
身体を確認してみたが、どこにも怪我はない。ただ膝小僧がジンジンと痛んだ。
「……死人のために死ぬなんてバカのすることだよ」
その声にふと顔を上げてみると、見慣れた笑顔があった。ただ見慣れない物がお腹に突き刺さっていたので、藤本は笑顔を返せなかった。
「あ、あやめ、それ痛くないの？」
「それってなに？　ぉわっ！　なにこれ！？　なにこれ！？」
あやめは今気づいたと言わんばかりの仰天顔になった。なに？と聞かれても返答に困る。
藤本は顔を引き攣らせたまま「……い、痛くないなら、いいんだけど」とあやめのお腹をまじまじと見つめる。
あやめの体には、車のアンテナのようなものが刺さっていた。
どうやら体を張って助けてくれたらしい。
周りにいた人たちは呆気に取られて立ち尽くしている。もちろん、再度あやめを轢いてしまった塾長もだ。愕然とした面持ちで車内からこちらを見ている。
遠くから救急車のサイレンが聞こえてくる。誰かが通報したのだろう。
あやめがサイレン音がする方に顔を向ける。そして、ふっと鼻で笑った。
「死人のために救急車呼ぶなんてバカのすることだよねぇ」
「これだけ機敏に動いてる人が死んでるなんて誰も思わないから」

※

あやめを乗せた救急車に乗り込み、藤本も一緒に病院へ向かう。

「あー、死んでてよかった。これ生きてたら超痛そうだもん、ねぇ？」

車輪付きの搬送用ベットの上で寝転がって足を組んだあやめはへらへらと笑っている。

口調はちっとも怪我人ではないが、腹にはなにかが刺さったままだ。それだけならまだしも、頭に巻いてた包帯が外されてからは、救急隊員の人達はお化けでも見るような顔をして隅の方で固まってしまった。

居たたまれない状況に藤本は嘆息するばかりだ。

「ねぇ、もっさん」

「ん？」

「好きだよ」

「は？」

相変わらず、あやめの言葉には前後の脈絡がない。藤本はポカンとした顔であやめを見やる。

あやめが静かな微笑を湛えて、藤本の顔に手を伸ばしてくる。

そっと頬に触れた手は酷く冷たい。体温の感じられないその手の平に藤本はあやめが死んでいることを今さらながら強く実感する。

なんだか泣きそうになってきた。泣かないようにと眉根を寄せると「今さらそんな顔しないでよ」とあやめが笑う。

「だって……」
「私にはもう心残りはないんだから。もっさんに気持ち伝えられたし、私を殺した犯人も捕まったし、いいこと尽くめ。あとは普通にゆっくり死ぬだけ」
「……死ぬなんて、言わないでよ」
「っていうか、もう死んでるんだけどね」

あはは、とあやめが笑う。しかし、藤本は笑う気になれない。ただじっとあやめを見つめる。
あやめは「そんなに熱い目で見つめないで」と気持ち悪く体をくねらせた後、真面目な顔になって言った。

「もっさんのために天国で祈っててあげるよ」
「……なにを？」
「これから先、もっさんが変なことに巻き込まれないで普通に暮らせるようにってね」

あやめがパチンとウインクする。
藤本は泣いてしまわないように顔を顰めた。
折角、あやめが明るくしようと頑張ってくれているのにその努力を無駄にしたくなかった。

「……そんなの祈らなくていいよ。変なことに巻き込まれてたら、またどっかであやめに会うかもしれないし」
「お？　もっさんってば、今後も私に会いたいっての？」
「たまにでいいけどね」

藤本がムリヤリ笑顔を作って言うと「じゃ、たまには姿見せてあげるよ」あやめもニッカリと笑顔を返した。

※

バイトで疲れ果てて帰ってきた藤本はエレベーターに乗り込み、階数ボタンを押すとそのまま少しだけ目を瞑った。

背後でスルスルと絹の擦れるような音がして「こんばんは」と親しげな声がかけられる。藤本はその声の主も確かめずに「こんばんは」と返した。

「なんだか疲れてるみたい」

「……まあね」

心配そうな響きの乗った声に藤本は漸く声の主を振り返る。時代がかった着物姿の少女が声同様に心配そうに藤本を見ていた。

「なにかあったの？」

「あったというかあってるというか……」

「現在進行形？」

「そういうこと……ねぇ、千歳ちゃん」

「なあに？」

「動く死体って見たことある？　昔はそういうの一杯いたって言うじゃん」

藤本の問いかけに少女、千歳はポカンと口を開け、小首をかしげた。それからなにやら考え込むように眉を寄せる。

「……それが疲れてる理由？」

「ま、そういうこと」

藤本は頷いてエレベーターの壁にもたれかかる。千歳は難しい顔のまま

「動く屍体ねぇ……人の骸に鬼が宿ることはよくあったけど」

「うーん。そういう感じじゃなくてさ」

藤本は首を振る。

「なんていうか、生きてる時そのままなの。性格とか行動とか、なにもかもがそのままで害はない、今のところ」

「……そんな妖怪は聞いたことないわ。第一、害がないのなら、どうしてそんなに疲れているの？」

「死体だから放っておくと腐るかなと思って、業務用の大きい冷蔵庫買ったんだけどさ、それのローンが大変でバイト三昧……」

実際は腐らなかったんだけどね、と藤本は弱弱しくぼやいた。

千歳の目が疑わしげに細めらる。

「……つまり、あなたは今、動く屍体と暮らしているの？」

その問いかけに藤本は溜息混じりの微苦笑で応えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4906u/

藤本さんの受難

2011年12月17日23時55分発行